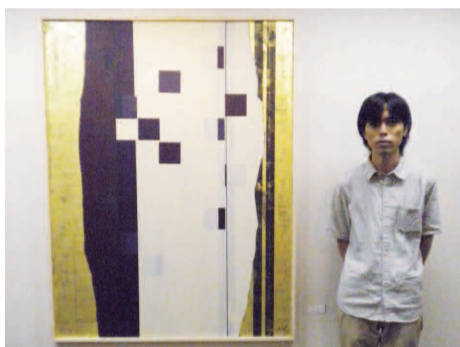
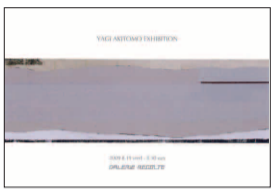


美術科

4

8月19日(水)から30日(日)まで、美術科の八木明知助教が福岡市中央区のギャラリーレコルテで個展『八木明知展』を開催しました。

今回の個展では、パネル・カンヴァス・岩絵具・箔・墨・アクリルメディウム・アクリル絵具を材料として、日本が古来より継承し、熟成し、発展させてきた、美意識・装飾美・精神性を、抽象表現した平面作品、9点(80号(3号)を展示しました。



音楽科

4

大分県文化振興財団と本学の提携により結成された「chicko グランシアタ・シニアオーケストラ」の指導のため来県しているNHK交響楽団員による第2回目の芸短大生を対象にした特別公開レッスンは8月24日(月)、本学音楽棟小ホールで行われました。

今回はホルン奏者、日高 剛氏による公開レッスンで、本学音楽科管弦打コース(ホルン)短大1年生3名、2年生1名、及び専攻科音楽専攻管弦打コース(ホルン)2年生1名の合計5名の管弦打コース(ホルン)の学生が受講しました。

NHK交響楽団員によるホルン特別レッスン開催



国際文化学科

4

毎年恒例、夏期海外語学実習。今年も無事行われました。今年度の参加者は、イギリス、パース・スバ大学で14名、オーストラリア、クイーンズランド・インターナショナル・ビジネス・アカデミーで5名、中国・北京語言大学で2名、韓国・ソウル市立大学で6名の学生が研修を受けました。

1ヶ月足らずの短い期間ですが、海外での経験を将来に生かしてほしいと思います。

※参加者数は、国際文化・情報コミュニケーションあわせての人数です



情報コミュニケーション学科

4

情報コミュニケーション学科では、公開講座「ころってなあに?」高校生心理入門」を、7月18日(土)、25日(土)、8月1日(土)の3回にわたって実施しました。この講座は、高校生を対象に、高校では学べることが出来ない「心理学」を、実験や実習も取りまぜて楽しく分かりやすく学んでいただくものです。何かと多忙な高校生ながら、受講者は20名を越え、「ころ」という身近で未知な学問の世界を積極的に楽しんでいました。

公開講座『ころってなあに?』実施しました。



学長コラム

中山 欽吾

<テーマ>

京都研修旅行に参加して



似顔絵/石丸 裕美

8月26日(水)から2泊3日で、国際文化学科で日本美術史を教える水野先生と美術科で日本画を教える河上先生に引率され、副手と学生達有志36名が参加した京都研修旅行に、私も夫婦で参加させていただきました。実は丁度40年前、新婚旅行で京都を訪れていたのですが、その時には有名な幾つかのお寺を訪問したばかりで、表面的な京都見物に留まっていた。その後、東京の幾つかの美術館で、珠玉の日本美術を視る機会は何度かありましたが、やはり京都の歴史の深みの中で視るのとは違います。今回、水野先生から教わっている学生達が昨年について研修旅行をするという話を聞いて、みんなと一緒に京都を勉強し直してみたいと思ったのはこんな訳があったのです。

参加者が多いので、少しはお手伝いにもなるかと思っただけですが、結局一緒になって感心したり感激したりの3日間でした。建物でいえば、京都御所の寝殿造、本願寺の書院造、曼殊院門跡の数寄屋造、京都島原にある角屋の揚屋建築、そして京都の町家と歴史的にも形式的にも多彩な建築を楽し

むことができました。曼殊院は中に上がって隅々まで拝観でき、角屋では閉館中のところを特別に開けてくださり、保存会の理事長自らが詳しく案内してくださいました。絵画では、尾形光琳、酒井抱一、鈴木其一など江戸時代を彩った琳派の巨匠や、伊藤若冲の見事な絵の数々を堪能できた相国寺承天閣や細見美術館、工芸ではバリ万博でヨーロッパの人たちを魅了した並河靖之の七宝記念館、そして紫織庵は様々な京友禅の織物や、保存されている貴重な屏風絵を視ることのできる町家の美術館でした。説明に立ったご主人は私立の美大でも染色を教えておられる方でしたが、畳の部屋では屏風は座った目線で視るのだという説明に、全員きちんと正座をしてハンケチで口を押さえながら熱心に耳を傾ける学生達の鑑賞態度をみて、感心しておられたのが印象的でした。

三条大橋に程近い、外人客も多い旅館に合宿したのを良いことに、朝早く抜け出して加茂川の風景をスケッチできたのはおまけですが、暑さを忘れたごっすり詰まった旅でした。

<連載>

芸術と文化の都市めぐり

第1回 ウィーン(オーストリア)

ウィーンは、ヨーロッパ随一の王朝・ハプスブルク家の都であり、その芸術文化もまた、彼らと深く結びついています。ここでは、ウィーンを訪れる人が必ず目にするであろう、いくつかの建築についてのみご紹介しましょう。

旧市街の中心にある聖シュテファン大聖堂は、14世紀の君主ルドルフ4世が、古い聖堂をより壮麗に改築するよう命じてできあがったものです。本来、この聖堂には2本の塔が並び立つはずでしたが、完成したのは片方の塔のみで、その特徴的な姿のままで人々に親しまれています。

その後、東方の大国オスマン・トルコの脅威のもとで、ウィーンは堅固な城壁を備えた要塞都市と化し、実際にトルコ軍による2度の包圍攻撃を耐えしのぎました。この町が、華やかに芸術の花開く宮廷都市となったのは、この戦争が終結した18世紀以降といえます。郊外には広大な庭園を備えた宮殿が次々に造営され、その代表は、マリア・テレジアの時代に完成されたシェーンブルン宮殿です。

19世紀後半には、フランツ・ヨーゼフの勅命で、かつてウィーンを守った城壁が取り壊され、代わって環状道路と公共建築群が作られました。このとき建造された国会議事堂、市庁舎、大学、美術館などは、今も現役で使われています。宮殿のような外観に華麗な内装が施された美術史美術館では、ハプスブルク家が数世紀にわたって収集した美術品が所蔵・公開されており、多くの人々を魅了し続けています。

(国際文化学科 准教授 高瀬圭子)



▲シェーンブルン宮殿



▲美術史美術館



▲聖シュテファン大聖堂